

共創に他者は必要か—実践と理論のあいだ (2)

○西 洋子 (東洋英和女学院大学), 三輪 敬之 (早稲田大学)

Do We Need Others For Co-creation To Understand Ourselves?

Gap Between Practice And Theory

○Hiroko Nishi(Toyo Eiwa University),Yoshiyuki Miwa (Waseda University)

要約: 本研究では、「共創に他者は必要か」という視点から、「共」と「創」とが組み合わさる「共創」の世界の独自性を探るために、著者らのこれまでの実践や実証研究の結果から「創」が生まれる「共」のあり方を考察した。その際、「共同」を対照に、1.「共」における自己と 2.「共」の手触り(質感)の2つを検討した。結果として、共創での「共」における自己については、実践の場では意識できない自己の連続的な変容が生じ、そうした自己同士の相互作用から「創」が生まれると考察された。また「共」の手触り(質感)については、共創では、相互身体が共鳴・共振する層と、引き裂かれ、ズレて、反発する層とが複雑に絡み合うことが実証研究と現場での実践感覚の双方から考察された。ここから「共創」での「共」の手触りは、異なる質の混在する、ごつごつとして素朴であり、外気が流れる柔らかさがあると考察された。

キーワード:共創, 身体表現, 実践

Keywords : co-creation, bodily expression, practice

1 緒言

「共創」の実践や研究を進めるに際して、「共」と「創」が組み合わさる世界の独自性はどこにあるのかという問いが浮上する。この問題に具体的に接近するために、「共創」(Co-creation)を「共同」(Collaboration)との差異から吟味することは、意味あることと考える。もとより、さまざまな社会的実践の現場は、共同的であり共創的である。両者は区別ではなく濃淡としてはたらくことは言うまでもない。

本研究では、共創の世界の独自性を探るために「共創に他者は必要か」という問いを立て、著者らのこれまでの実践や研究結果から「創」が生まれる「共」のあり方を考察する。その際、1.「共」における自己と 2.「共」の手触り(質感)の2つを検討する。最初に本研究の視点について、以下に若干の説明を行う。

「共同」は、実際の行為に先んじて到達すべき目標をある程度設定し(あるいは特定の目標のもとに人々が集い)、それを達成する方法を定め、各人が役割を分担して進む行為である。これに対して、創造的行為としての「共創」は、行為に先んじて目標を定めるという発想を持たない点に独自性があると考えられる。到達すべき目標が先んずれば、人の創造性は狭められ、阻まれるからである。目標のもとに分担され遂行される各要素の積み重ねや組み合わせは、過去の延長とその

ループである。堅固ではあるが、脆くとも跳躍を目指す創造とは一定の距離がある。それでは、「共創」での「創」はどのように起こるのであるのか。この問題を扱うためには、「創」が生まれる「共」のあり方を検討しなければならない。

本研究では、共創における「共」のあり方を検討する第一として、「共」における自己はどうあるのかという問いからはじめる。「共同」での自己は、割り振られた役割を全力で全うする確立した自己である。これに対して、「共創」での「共」における自己は、どのような自己なのであるのか。

第二は、「共」はどのような手触り(質感)なのかという問いである。「共同」では、各自が分担する課題は確実に遂行され、当初から予定した位置にしっかりと配置される。設計図にそって隙間なく埋め尽くされる「共」は、丹念に織られた織物であり、滑らかな極上の手触りとなる。それでは「共創」の「共」は、どのような手触りとして感受されるのであるのか。

以下では、著者らのこれまでの実践や実証的研究の結果と理論とを往還しながら、1.「共」における自己と 2.「共」の手触り(質感)の2つの問いの検討を進め、未だ着手できていない課題を明らかにする。

2 結果および考察

1. 「共」における自己

本研究では、共創での「共」における自己を検討する実践事例として、著者らが2012年12月から東日本大震災の被災地である宮城県石巻市で継続している「手合わせ表現」ワークショップ(Fig. 1)における重度の自閉症児 T さんとファシリテータである著者(西)との表現をとりあげる。事例検討の前に、「共創」での自己とその変容は容易に意識できないことを論じる。次に、そうではあっても、実践現場では「いつの間にか」「自然に」変わっていく自己が語られることと、参加者間で相互に承認される特定の「感じ」があることに言及する。その後、Tさんと著者との「手合わせ表現」時のビデオ分析から見いだされた変化を示し、さらに、この期間の社会的行動(挨拶)場面の行為の変化を紹介する。



Fig. 1: Workshops for Various Hand-Contact Improvisations

① 自己の変容は容易に意識できない

自転車にのることや、泳ぐことに顕著なように、身体には、ある特定の動きを重ねることで、これまでではできなかったことができるようになる瞬間がやってくる。その瞬間は、意図して作りだせるものではない。しかし、一旦新たな身体の運用法が獲得されると、今度はできなかったということがどのようなことなのかわからなくなり、できなかった自分には戻れなくなる。なぜできたのかわからないだけでなく、なぜできなかったのかもわからない、そのようにして身体は、自分では意識しないままに多くの動きを獲得し、消失させて、自己と世界とのかわり方は変化を続ける。

先に述べたように、共創は向かうべき統一の目標をもたない。そうした中で新たな「創」が生まれるためには、それぞれの自己は「共同」のような定まった自己、確立した自己ではなく、流動的で連続的に変容する必要がある。連続的に変容する自己同士の相互作用が「創」を生むと考えるからである。

「自己が連続的に変容する」を目標とする行為として、武道における修業があげられる。内田は、武道の

修業プロセスは、「『私は・・・』と名乗る修業の主体が、連続的に別のものに変容する歷程なのである」[内田 13]と述べている。そして武道における身体技術の向上は、「『それまでそんな身体の使い方ができるとは思ってもいなかった使い方』を発見し『できてしまった』後に『私は今いったい何をしたのか』という遡及的な問いがたちあがるようなブレークスルーの経験である」[内田 13]としている。

一方「共創」では、先述のように、行為に先んじて目標を定める態度はもたないことから、まず、自転車に乗るや泳ぐといった完成形は存在しない。例えば「手合わせ表現」は、相互に手(身体の一部)をあわせて動き、表現を創るという誰もが行える行為である。即興なので同じ表現は二度と再び繰り返されることはない。したがって、できる-できない、上手-下手はなく、勝敗もない。武道や芸道のような身体技術の向上も問わない。

修業であれ共創であれ、「自己が連続的に変容する」ためには、「完成形」を先取りする単一の「ものさし」に居着くことは避けなければならない。完成形から現在の自己を眺めることはできないため、自己が変化しているという実感を築くことは容易ではない。武道や芸道の技術向上のような、明らかな外的変化は生じないため、他者の視点から変容を捉えることも極めて困難である。

② 「いつの間にか」「自然に」として語られる変容

上記とは矛盾するが、共創の現場では、人々が「いつの間にか」「自然に」変わることは多く語られる。石巻の「手合わせ表現」ワークショップには、発達障害の子どもが多く参加している。当初、殆どの保護者は、自分は子どもの付き添いで参加していると自己を位置づける。しかし「いつの間にか」「自然に」ワークショップを楽しむようになり、自分自身が参加したくてワークショップにやってくるのだと語るようになる。一方で、子どもの変化の方は、かなり具体的に語られる。例えば「手合わせに来るのをいやがらなくなった」「いつも周囲をぐるぐると回っていたのに、いつの間にかまわらなくなった」「自分からだれかと手を合わせに行くようになった」「会場の外にでていく子どもがいなくなった」「気がついたら、中央で手合わせしている」「自分なりの表現のようなものを創っている」等である。もちろん、ワークショップを重ねることでの「慣れ」が多く作用する点は否めない。しかし、保護者や施設の先生方、支援学校の先生方の多くは、「慣れ」では片づけられない子どもたちの変化に驚き、喜び、励まされるのである。この場合、先の保護者に「いつの間にか」「自然に」起きた変容は、実は発達障害の子どもの

変化として具体的に語られる内容から接近可能であることがわかる。つまりは、障害の有無にかかわらず、周囲を気にかけて全体を把握できないと落ち着かない、時にはその場から離れたくなるような自己から、他者と手をあわせること、共に表現を創ることを楽しむ自己への変容が、誰にでも等しく起きていると推察されるのである。発達障害の子どもは、共創の場で誰にでも起きてはいるが、意識することは難しい連続的な変容への気づきを促す独自の存在(ファシリテータ)であるといえる。

「手合わせ表現」のワークショップでは、このように、ある程度の時間をかけて生じる「いつの間にか」「自然に」の変化が共有されるだけでなく、ワークショップの最中に、或る人と或る人との「手合わせ表現」に参加者から一斉に拍手がおくられることは多くある。また、全員での手合わせが終了した直後に、誰からともなく自然に拍手が起きることもある。どちらの場合も、拍手の対象となる表現が一律の基準に照らして技

術的に優れているからではない。その二人でしか生まれないような感じやこれまでにない新しい感じ、集団の場合は、相互のつながりがひろがって全体でひとつの生命体のような感じを受け取っての拍手である。完成形をもたず、ものさしは存在しなくても、年齢や性別、障害の有無、経験の差に関わらず、同じような場面で皆が一斉に拍手する。発達障害の子どもは、不思議とこうした場面を敏感に察知して、いきなりその場に参入する。当初はその意味を掴むことができず突飛的な行為のように思っていたが、回数を重ねることで、彼らが豊かな表現の到来に極めて敏感であることに気づくことができた。このように現場では、連続的に変容する者同士の相互作用が契機となり、思いもかけない表現が出現したことは、ある「感じ」として確かさをもって共有され、時にその場に引き込まれる強い衝動をも生むのである。しかし、その「感じ」はどこからやってくるのかについては、未だ接近の糸口は見つかっていない。

Table 1: Hand-Contact Improvisation between Boy T and Author at a Workshop

【第1回 (2012.12.09)】Nは、3時間の時間内に何度かT男と手を合わせることや繋ぐことを試みたが、身体的な接触や目を合わすことはできなかった。Nが近づくとT男は避けて別の場所に移動する状況が繰り返された。ワークショップ終盤のグループでの即興表現の発表場面で、T男がスキップをしながら、会場の中央を横切るように表現空間に参入した時、Nは反対方向からスキップを行い、すれ違いざまにハイタッチで手をあわせることを連続して2回行った。

【第2回 (2013.02.11)】Nは、参加者の一人ひとりと「手合わせ表現」を行い、T男の順番となった。母親の隣に座っていたT男は、Nが歩み寄っても下を向いたままであった。Nは右手でT男の右手をとってもT男が特に反応する様子はなかった。その右手を一度離し、今度は同じ位置にあらためて左手を出す、T男は下を向いたまま、その左手に自身の右手を合わせた。Nが今度は右手を出す、T男が左手を合わせた。下を向き座ったままのT男と中腰となっているNとが向き合って両手を合わせる形となった。Nは自身の手が下になるよう手をつなぎ直してT男の手を持ち上げるように力を加えてみると、T男は少し驚いたような表情で顔をあげ、Nに促されてすっと立ち上がった。そのままNが後ろ向きに歩き、参加者がつくる輪の中央に二人で移動しながら、ゆっくりとした「手合わせ表現」を行っている。次いで、表現の過程で一度離れた両手を再度合わせることはできているが、2度目に離れて、再度両手を合わせての終了となった。

【第3回 (2013.03.20)】この回の特徴は、向かい合って手を合わせる際に、前回は身体が一定の距離を保ったままの表現が殆どであったものが、両手を合わせたままお互いに近づいたり離れたりと、さまざまな距離でのかかわりをつくりだしている点である。また、第2回と比較して、表現空間は広く、手を合わせたり繋いだりの状態でゆっくりと歩くことや小走りに移動することなど、多様な速度での移動を行っている。その際、手を繋いだ状態でT男がNに先行して移動する場面がある。また、前回までのT男とNとの身体の位置関係は、向き合っているか横並びであったものが、この回は片手を繋いだ状態で、T男がNの背面に回り込んだり、その逆にNがT男の背面に回り込んだりしている場面が観察された。その際、T男の背中にNが表現の自然な流れでタッチしても回避することはなかった。また、合わせた手や指での力のやりとりが生まれている様子が観察された。

【第5回 (2013.06.09)】ワークショップの参加者全体に対してNが「手合わせ表現」を説明するデモンストレーションの場面でT男との表現を行っている。二人での「手合わせ表現」の最中にNが大きな声で説明をする様子も多くあるが、T男は耳をふさぎ驚いた表情を見せたりはしているが、その場を離れることはない。また、動きながら説明を行っているため、表現自体の流れとは無関係に動きのスピードが緩んだり動きがとまったりする状況が何度か生じているが、T男は上手く適応しながらNと共に表現を行っている。前回に出現した力のやりとりが手や指だけでなく合わせた手を介して身体全体に広がり、それによって自他の境界が緩むような瞬間が認められた。

【第6回 (2013.07.14)】NがT男を「待つ」時間の生成とT男がそれに応える表現が実現している。「手合わせ表現」では、両者が非接触的な表現を試みる初期の段階としては、合わせている両手を一旦離して、直後に同時に同じ位置を目指して接点をつくりなおす表現が一般的に多く行われる。この回には、このような表現以外に、片手を繋いだままで、もう一方の手を離して別の位置で待つ様子や、繋いでいる側の手も瞬間的に離し、身体全体が非接触となる時間をつくる様子が何度か確認された。さらに、相互に両手を離し、これまでとは別の位置に置かれたNの非対称的な両手に向かって、T男がゆっくりと歩み寄り手を合わせるといった新しい場面が観察された。

【第8回 (2013.10.13)】これまでと同様のゆったりとした動きからはじまり、中盤から指を介した強い力のやりとりが行われている。やがてそれが全身に拡大し、向き合って両手をつないだまま架空の一本の直線上を前後に大きく移動して押したり引いたり表現へと発展している。その際、両者ともに他者の身体空間にダイナミックに入っていくことや、逆にこちら側に引き込むような表現を行っていることが観察される。

③「共創」での「共」における自己を検討する事例

共創での「共」における自己を検討する事例として、以下では石巻市での「手合わせ表現」ワークショップにおける自閉症児 T さんとファシリテータである著者（西）との表現をとりあげる[西・三輪 16]。この事例を取り上げる理由は、先の保護者の場合と同様に「なんとなく変わってきているように思えるが、何が変わったのかはよくわからない」からである。事例検討に際しては、収録映像を幾度も見返しながら、気がついた点を箇条書きで書きだし徐々に視点を絞りながら考察を進めた。具体的には、第1回（2012.12.09）から第8回（2013.10.13）までの計8回のワークショップ時に収録した全ての映像記録の中から、Tさんとファシリテータである著者の2名が、ワークショップの参加者全員の前で「手合わせ表現」を行う場面を抽出した。その結果、第1回、2回、3回、5回、6回、8回の計6回にその場面が確認された。Table 1には、ビデオ映像からそれぞれの回で観察された様子をまとめる。

Table 2は、Table 1で抽出した「手合わせ表現」時の両者の身体的な関係のあり方を、①<接点や界面の生成と関係>、②<接点や界面での時空的関係>、③<身体の相対的な位置関係>の3つに分類し、それぞれに関連する要素を抽出してワークショップの時間的経過にそって並べたものである。出現の形態については、①<出現：○>、②<不完全な出現：△>、③<出現せず：×>の3つに分類し、初めての出現については、<出現：●>、<不完全な出現：▲>として2回目以降と区別した。

まず、①<接点や界面の生成と関係>では、合わせた手によって接点や界面を生成させて自他の境界を確認し合い、次第に手や指で力のやりとりが生まれた。②の<接点や界面での時空的関係>では、手を合わせたりつないだりする接触的な局面が同時的につくられる段階から、両手から片手へ、その片手を瞬間的に離すという非接触的な局面が徐々に拡大し、やがては一

Table 2: How Bodily Relation is in Hand-Contact Improvisation between Boy T and Author

ワークショップNo.	1	2	3	5	6	8
ワークショップ実施期日	2012.12.09	2013.02.11	2013.03.20	2013.06.09	2013.07.14	2013.10.13
Tさんとファシリテータとの手合わせ表現時間	-	0:50	3:37	0:42	0:40	1:02
①接点や界面の生成と関係						
手を合わせる1. 接点をつくる	●	○	○	○	○	○
手を合わせる2. 界面をつくる		●	○	○	○	○
手をつなぐ(手をつかむ)		●	○	×	×	○
指を合わせる		▲	○	○	○	○
手で力のやりとりをする			●	○	×	○
指で力のやりとりをする			▲	●	△	○
②接点や界面での時空的関係						
同時に接点をつくる	●	○	○	○	○	○
同時に界面をつくる		●	○	○	○	○
同時に接点をつくりなおす		●	○	○	○	○
界面で待つ1. 片手をつないだまま			●	×	○	○
界面で待つ2. 片手を瞬間的に離して				×	●	×
界面で待つ3. 両手を離して				×	○	○
③身体の相対的な位置関係						
身体が向き合う	●	○	○	○	○	○
身体の距離が相互均一に変化する			●	○	○	○
身体の後方に廻り込む			●	×	○	×
身体の距離が不均一に変化する						●

●初めての出現 ○出現 ▲初めての不完全な出現 △不完全な出現 ×出現せず

方が新たな界面を設定し相手を待つことと、他方が待つ側の界面へ手を合わせにいく表現へと変化した。③の<身体での相対的な位置関係>では、身体は多様な動きを行いながらも、両者の身体と界面との距離は常に一定である段階から、その距離が相互均一の状態のまま両者の身体が近づいたり遠のいたり動的に変化する段階へと移行した。やがて、この身体の距離は相互不均一となり、手をつないだまま相手の後方に回り込んだり背中に接触したりという、背面への積極的な探索が起きていることが明らかとなった。

Table 3は、ワークショップの最後に行っている、参加者が順番に感想を述べる場面での T さんへと向けた著者の行動を、「呼びかけ」、「移動」、「問いかけ」、「応答」の4つの局面に分類して記述したものである。また Fig.2には、1、4、6回のこの場面の映像記録を切り出して並べた。これらより、著者自身まったく意識していなかった T さんへと向かう自己が、連続的に大きく変容していることを具体的に確認できた。ここから、実際の「手合わせ表現」場面での意識できない身体相互の関係性の変容が、社会的行動場面での連続的な変容に影響を与える可能性が示唆され、大変興味深いといえる。

Table 3: Act of Facilitator toward Boy T at a Feedback Session

回	期日	呼びかけ	移動	問いかけ	応答
1	2012.12.09	迎えに行く	腕をつかんで連れてくる	腕をつかんだまま	Tの前にて「せーの」の言葉かけ。片手で短いタッチ
2	2013.02.11	迎えに行く	腕をつかんで連れてくる	背中や肩に触れたまま	Tの前にて、両手で長いタッチ
3	2013.03.20	手を差し出しながら迎えに行く	その場で手をつなぐ	手をつないだまま	片手をつないだまま逆の手でタッチ
4	2013.04.28	少し離れた位置から手招きをする	手は後ろにだすが、触れることなTの少し前を歩く	横に並び、触れることなく問いかける	間を取り合ってタッチ
5	2013.06.09	前回より離れた位置から手招きをする	Tに先行して歩き、Tを待つ	横に並び、答える方向を示しながら問いかける	間を取り合ってタッチ
6	2013.07.14	かなり離れた場所から呼びかける	横並びの後、先行するTの後ろを歩く	横に並び	言葉を発しているような間合いで2度応答する

第1回 (2012.12.09)



迎えに行く 腕をつかんで連れてくる 腕をつかんだまま Tの前にて「せーの」の言葉かけで短いタッチ

第4回 (2013.04.28)



少し離れた位置から手招きをする 手は後ろにだすが、触れることなTの少し前を歩く 横に並び、触れること間を取り合ってタッチ

第6回 (2013.07.14)



かなり離れた場所から呼びかける 相互に歩み寄り、横並びの後、先行するTの後ろを歩く 横に並び 言葉を発しているような間合いで2度応答する

Fig.2: Change in Facilitator at Feedback Sessions (1st, 4th and 6th)

2. 「共」の手触り(質感)

隙間のない滑らかな手触りとなる「共同」での「共」に比べ、「共創」での「共」は、どのような質感をもつ

のであろうか。本研究では、最初に、共著者の三輪らが「共創の表現を測る」実証的研究で見いだした「手合わせ表現」に生起する2つの質の異なるフェーズを紹介する。その後、2つのフェーズの各々について、一連の研究に被験者として参加している著者の実践的感覚と実践現場でのファシリテータとしての経験を重ね合わせながら、「共」の手触り(質感)へのアプローチを進める。

① 一軸の計測装置での「手合わせ表現」から

共著者の三輪らは、共創表現のダイナミクスを検討するために、「手合わせ表現」の表現感を損なわずに動きを簡素化し、かつ計測可能な一軸の手合わせ装置を開発した。そして、初めて「手合わせ表現」を行う者からワークショップでファシリテータを担う者までの多様な経験を有する人々を対象に、開発した装置による「手合わせ表現」の計測を重ね、結果の解析を進めている。この研究で三輪らは、「手合わせ表現」では、相互に合わせた手の動きに先行して、意識にはのぼらない身体の重心(正確には、床反力中心)が動くことを発見した。また、2分程度の実験的試行では、意識にはのぼらない重心の移動が二者間で相互に同期して先行するフェーズと、それが崩れるフェーズの双方が混在することを見いだした。さらに、相互に同期するフェーズの割合は、表現の経験の豊かなペアの方が高い傾向にあることを明らかにした。結果の一例を Fig.3 に示す。

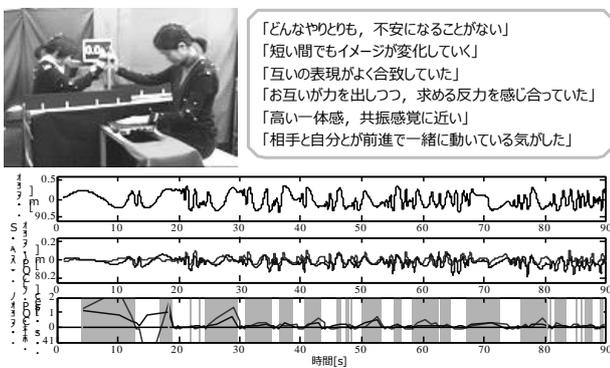


Fig.3: Measurement of Co-creative Expression (Miwa et al [Miwa 12])

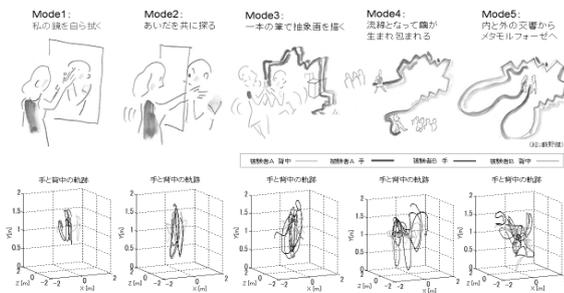


Fig. 4 Change of expressive relationship through hand contact improvisation (Nishi and Miwa 2012)

著者は、三輪らの一連の研究に被験者として参加している。以下では、装置で行った「手合わせ表現」の実感と実証研究から導き出された結果、さらに実践現場での多様な人々との「手合わせ表現」時の感覚を重ね合わせながら、異なる2つのフェーズと「共創」での「共」の手触りとの関係について考察を進める。

② 無意識のうちに身体相互が同期するフェーズ

「手合わせ表現」においては、まずは Fig.3 にグレーで示す部分、つまりは、意識にはのぼらない重心の移動が同期するフェーズが断続的に現れることが重要になると考える。現場での「手合せ表現」では、2つの異なる身体があたかもひとつの身体となって、1度限りの表現を創り合う感覚が頻繁に経験されるが、実証研究で見いだされた、無意識のうちに身体相互が同期するフェーズは、この実践感覚と関連が深いと推察する。

この際の自己と他者との関係性を考えると、例えば「両手で拍手する」際には、主客なく先後のない「拍手という行為の主宰者は拍手そのもの」であるとされるように、「手合わせ表現」でのこのフェーズでは、自他の区別なく、表現そのものが表現を動かし、表現が表現を進行していると感じられるのである。

一方、Fig.4 は、「手合わせ表現での共振の深化」示すものである。この研究では、著者のこれまでの実践経験から、「手合わせ表現」を5つのモードに分類し、三

Table 4: Notes of Self-reflection in Hand-Contact Improvisation (Nishi2012)

出会ったばかりの子どもと向き合い、掌を相手に向けてゆっくりと差し出してみる。すると、子どものからだは素直に迎え、相互に手が重なり合うこととなる。触れ合った接点を静かに動かして始めると、そこから新しい波が生じて、腕、肩、胸へと伝わって呼吸が引きだされ、私たちは自然に眼差しを交わし、微笑みを交わし合う。合わせた手は、あいたの空間の探索をはじめ、からだから生まれるおしゃべりは、時に断線しながらも途切れることなく重ねられていく。いつの間にか、合わさった手はひとつの絵筆となつて、無限に広がる空に抽象画を描くかのようなのである。① やがて絵筆の感じは消え去り、つながり合う私たちのからだ自体が、一本の線となつて絵の中に入り込み、勢いよく流れはじめる。② そうなると、向かい合わせでいる必要はなく、一緒に長くなったり短くなったり、上に伸びたり下に向かったり、ぐるぐると回り捻じれながら奔放に描き、描かれていく。すると、消えゆく線もこれから生まれる線もどんとどんとつながり合つて、からだの周囲には開かれた立体がかたちづくられていく。その縁に沿ってさえいれば、たとえ二人のからだは遠くに離れても、私たちは相変わらず共有することができる。こうして、動きの自由度を獲得したそれぞれのからだは、変化しながら生まれ続ける私たちがかたちを抛り所にしながらも、なおそれをとび越え、外の世界へと「私」を解き放つのである。周囲の光や空気を吸い込み、ざわめきと景色とを私たちの世界に持ち帰ることが出来れば、新たな息吹が生産する。③ それに包まれながら「私」と「あなた」とは再び出会い、そのようにして、私たちの表現は尽きることなく持続していくのである。

輪らと共同でモーションキャプチャを用いてそれぞれのモードの動きの特性を検討した。Table 4は、この研究でモード間の移行を検討する素材とした「手合わせ表現」時の著者の内省記述である。以下では、この記述と先の研究から見いだされた「無意識のうちに身体相互の重心移動が同期するフェーズ」との関連性を考察する。

著者は、あたかもひとつの身体となる感覚を、下線①の「いつの間にか、合わさった手はひとつの絵筆となって、無限に広がる空に抽象画を描くかのようである」と描写している。ここでは、自他や主客の二元性がなくなり、表現のための一本の絵筆となるが、一本の絵筆と描かれる表現（線）とは未だ分離していることが読み取れる。その後の下線②「やがて絵筆の感じは消え去り、つながり合う私たちのからだ自体が、一本の線となって絵の中に入り込み、勢いよく流れはじめる」は、表現自体が表現世界の主宰者となる描写と捉えられる。

③ ひとつの身体の出現の奥に

こうして、生成したひとつの身体は、表現それ自体と分離されないものとなるが、「手合わせ表現」の世界は、そこで終わるわけではない。その後は、下線③の「周囲の光や空気を吸い込み、ざわめきと景色とを私たちの世界に持ち帰ることが出来れば、新たな息吹が生成する」と続き、表現世界の主宰者である表現自体が、さらに、外部世界との交流をはじめることによって、ここから実践場面で著者は、「共」における「新たな息吹」となる「創」の到来は、異なる2つの身体があたかもひとつとなるという主客や自他を超える表現の出現にとどまらず、表現自体が表現世界を主宰し（その時自己は、表現に一切を委ね）、さらにはその表現が外部世界との交流をはじめることによって生まれると感じていると考察される。

④ 同期が崩れるフェーズ

それでは、同期が崩れるフェーズは、実践場面ではどのように感受されるのであろうか。装置を用いての「手合わせ表現」では、動きが簡素化されているためか、実験的試行なので手合わせのみに意識が向けられるためかは定かではないが、いったん出現したひとつの身体が突然姿を消して、元の二人の身体へと戻るフェーズはより明確に感じられる。「ズレる」「つながらない」「合わない」と、引き戻された自己がはっきりと強く意識化される瞬間である。

ズレは表現の切断である。この場合、実際に表現している感覚からすると、先述のように元の自己へと意識が戻る場合は確かにある。一方で、流れの転調のような、これまでとは異なる表現世界が目の前に突然拓

かれる感覚が到来する場合もある。潮騒が響く世界に寒風が吹き荒れたり、緩やかな世界が持続していたのに急降下や一切が停止する急転換が現れたりする、あるいはその逆もある。こうした感覚もまた、ワークショップでファシリテータを担っている時よりも一軸の装置での手合わせの際の方がよりはっきりと感受される。その理由は、現場でのファシリテータとしての自己の役割意識と関わるように思えるが、この問題を検討する材料は充分ではないため、今後の課題とする。

3 まとめ

本研究では、「共創に他者は必要か」という問いを立て、著者らのこれまでの実践や研究結果から「創」が生まれる「共」のあり方を1.「共」における自己と2.「共」の手触り（質感）の2つの視点から検討した。まず、共創での「共」における自己については、実践事例で捉えたように、意識できない自己の連続的な変容がさまざまな場面で生じ、その相互作用から「創」が生まれると考察される。また、変容の多くは、意識するのが困難であるという点で、身体から生じていると考える。その際、現場では、特定の要因が共創を加速させるのかもしれないが、現段階では変容の一端を確認できたのみであり、要因の有無や内実は今後の課題である。

次の、共創での「共」の手触り（質感）については、共創では、相互身体が共鳴・共振する層と、引き裂かれ、ズレて、反発する層とが複雑に絡み合うことが考察された。ズレや反発の層の意味は、一元的ではない。連続して生成する表現の主宰者は、あくまでも表現であり、そこにとどまらず、「創」は表現と外部との交流からもたらされる可能性が内省の記述から読み取れた。異なる層を併せ持つ陰影のある編地の手触りは、ごつごつとして素朴であり、外気が流れる柔らかさがあるとまとめられる。

引用・参考文献

- ・[三輪 12] 三輪敬之:共創表現とコミュニカビリティ支援,計測と制御 51 巻 11 号,pp.1016-1022 (2012)
- ・[西・三輪 16] 西洋子・三輪敬之:被災地での共創表現と共振の深化-このフィールドは何を語りかけているのか,アートミーツケア学会オンラインジャーナル 第 7 号,pp. 1-18(2016)
- ・[内田 13] 内田樹:修業論,光文社(2013)
- ・[湯浅 77] 湯浅泰雄:身体-東洋的身心論の試み,創文社 (1977)

*本研究は JSPS 科研費 JP15K12636,JP17K01645 の助成を受けたものです。